

中野隆生さんとの思い出

中野隆生さんを学習院大学史学科にお迎えしてから、いつの間にか歳月が経ち、中野さんは、二〇二〇年三月一杯で史学科を退職される。

私は中野さんとは同じ大学院の出身、いわば同窓生であり、中野さんは先輩に当たる。少し詳しく言うと、中野さんが東京外国語大学フランス語学科を卒業されて、東京大学大学院人文科学研究所（西洋史学専攻）に入学された年に、私は同じ大学の文学部西洋史学専修課程に進学して後に大学院に進学したと言関係である。それから一〇年余り同じ研究室の先輩、後輩の関係にあった。ただし私が在籍していた時期には、正直なところ、あまり深いお付き合いはなかった。その理由は、中野さんがフランスのリール大学に何年間も留学されていたこと、また、そもそも専門とする時代が私は西洋古代史（ローマ史）であり、中野さんは西洋近現代史（フランス史）であることがあり、授業や研究会等で一緒にすることもほとんどなかったからである。私は、中野さんのことを一九〜二〇世紀フランスの社会運動史や都市空間について優れた研究発表されている

先輩として僅かに認識していただけであった。

私と中野さんが本格的にお付き合いすることになったきっかけは、大学院時代から約二〇年間を経た、二〇〇七年六月の学習院大学学長選挙であった。私はこの年の四月から長期研修（いわゆるサバテイカル）の最中であり、一年間授業や会議の義務から解放されて六月にはイタリアのローマに滞在していた。その滞在中のホテルに史学科の同僚から急報が届いた。西洋近代史担当の福井憲彦さんが学長に選出されたとの知らせであった。当時、福井さんは学校法人学習院の常務理事を兼ねており、いつか学長に選ばれるのではないかとこの予見はあった。法人の常務理事も重責であるが、学長とは多忙さが異なり、学長に選ばれた教員が所属する学科は、学長の後任を迎えることができることになっていた。帰国後、私は西洋中世史担当の亀長洋子さんと福井さんの学長就任に伴う事態をどうするか相談した結果、西洋近現代史の学部生・大学院生の指導のためには、福井さんの後任の方を迎えるしかないとの結論となり、候補者を探し始めた。学習院大学史学科西洋近現代史ゼミでは、代々フランス

島田 誠

近現代史専攻の方が就任しており、やはりフランス近現代史の方を中心に候補を選ぶことになった。そこで、第一候補者に挙がったのが中野さんであった。中野さんの学問は、実証と理論を兼ね備えた研究方法が印象的であった。この過程で読んだ一九九九年に山川出版社から刊行された中野さんの代表作『ブラーグ街の住民たち―フランス近代の住宅・民衆・国家』は、一九世紀後半から二〇世紀初頭の低家賃住宅における居住空間の編成とそこでの住民生活や人的結合の関係を具体的な事例に即して検討している研究書であった。

常に史料の欠如や背景の不鮮明さに悩む古代史研究者には、この本での実証と理論的見通しの両立が羨ましくも妬ましくも感じた優れた研究である。中野さんは、その頃は首都大学東京の都市教養学部に勤められていた。ご存知の方も多いように、首都大学東京はかつての東京都立大学をはじめとする幾つかの都立の大学を石原慎太郎都知事が強いイニシアティブの下、トップダウンで再編して二〇〇五年に誕生した新大学であった。中野さんに最初に学習院大学史学科への移籍をお願いしたのは、池袋駅近くの地下の喫茶店であったと記憶している。中野さんは、持ち前の穏やかな雰囲気に対応して下さった。最初はなかなか私どもの申し出に頷いて下さらなかったが、幸いなことに、最後には中野さんは私たちの提案に応じて下さり、二〇〇八年度四月に学習院大学文学部史学科に着任された。

史学科に着任された中野さんは、あっという間に学習院大学史学科の環境に馴染まれたように私の眼には見えた。学習院大学の史学科は、教員同士の間関係も良く、学生も真面目で働きがいのある職場であるが、同時に人使いの荒い職場でもある。私も二〇年余り

以前に史学科に着任した時には、前の職場に比べて充実しているが、大変忙しい仕事に驚いた記憶がある。中野さんも例に漏れず、史学科に着任するや、主任・教務委員と学科運営の要であり、大変に忙しい職務を歴任された。史学科は、毎週水曜日に科会を開き、史学科プロパーから文学部、時には大学全体の問題まで議論するが、学科主任はその議論を取り仕切り、他学科や文学部全体との良好な関係の維持にも目を配らねばならない。教務委員は、言うまでもなく、教員の中で学生と最も直接に向き合う仕事であり、昨今では学生に関わる様々な問題の相談を受け、それを学生の立場を考慮して処理しなければならぬ立場となる。その他、具体的な内容は記せないが、入学試験関係の、いささかデリケートで神経を使う仕事も務められた。中野さんは、これらの仕事を冷静かつ淡々とこなされていた。

さて、個性豊かと言うか、いささか自由すぎる面もある史学科の教員の中では、中野さんが良識派であることは、衆目の一致するところだろう。何時も穏やかな表情で、ゆっくりと論理的話ぶりは、学生に対しても教員同士の間でも変わることはない。特に学生指導では、穏やかな中に厳しい指導と評価は、定評のあるところである。中野さんは、一年生の基礎演習と史学概論、二・三年生の学部演習、四年生演習、大学院の演習を担当されていた。私は、これらの授業の内、四年生演習の授業を何年か一緒にしたことがある。卒論のテーマ・研究の進行状況を報告する学生に対しても、穏やかかつ論理的に、しかし、時には鋭く問題点を指摘されていた。特に方法論の面での鋭い指摘が印象的であった。また、中野さんは、一年生に歴

史学の歴史や方法論を教える史学概論を担当され、歴史好きだが、難しい理論的な話や社会経済史が苦手な最近の史学科一年生からの悲鳴をよく聞いたものであった。しかし、この中野さんの授業の陰でここ何年か社会経済史や歴史理論に関心を持つ学生が明らかに増えていくように感じる。中野さんの薫陶を受けたお陰であろう。

四月からは中野さんのいらっしやらない史学科が始まる。新たな西洋近代史の教員を迎えて、史学科の伝統を引き継いで行こうと思う。

